麻薬王の巣窟での悪夢

ｆｅｍｃｉｒｃ

この作品はR18描写を含むため、18歳未満の方は閲覧禁止です。

HinaProject Inc.

注意事項

このＰＤＦファイルは小説家になろうグループサイトで掲載中の作品をＰＤＦ化したものです。
このＰＤＦファイルおよび作品の取り扱いについては、小説家になろう利用規約が適用されます。そのため、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止いたします。作品の紹介や個人用途での印刷および保存にはご自由にお使いください。

【作品タイトル】
麻薬王の巣窟での悪夢

【Ｎコード】
Ｎ７１０３ＣＢ

【作者名】
ｆｅｍｃｉｒｃ

【あらすじ】
麻薬組織を壊滅しようとして、逆に捕らわれてしまった正義のスーパーヒロインが受けることになる常軌を逸した私刑。

『麻薬王の手中での恐怖』のあらすじ

正義のスーパーヒロインであるワンダーレディは、パナマ沿岸で行われている麻薬の密輸犯罪を撲滅するため、単身、その麻薬組織のアジトへと向かう。

しかし、不覚にも逆に捕らわれの身となってしまう。そして、麻薬組織のボス――マニュエル・ロドリゲスによる凄惨な私刑を受けることとなる。

パナマの麻薬王と呼ばれているロドリゲスは、一見、紳士風の男だったが、女性に対する残虐さで有名な人物として知れ渡っていた。

ロドリゲスは、ワンダーレディを衆人環視の中で全裸にして性的に辱める。そのうえ、彼女のアマゾンの女王としての誇りを傷つけるため、その自慢の巨乳へ乳首ピアスを施してしまう。

さらに、ロドリゲスは、ワンダーレディの乳首に取り付けたピアスリングへ釣り糸を結びつけ、アジトのある島の埠頭で、乳房を釣り竿代わりにした魚釣りを数時間にわたって、彼女に強要したのだった。

ワンダーレディは麻薬王の部下たちの隙を突いて、その地獄のような島から脱出を果たす。そして、どうにか仲間の元まで帰還する。

ワンダーレディから、その屈辱に満ちたミッション内容を聞かされたバットメイデンは、スーパーヒロインを辱めたロドリゲスに制裁を加えるべく、単身、パナマに向かうことを決意する。

『麻薬王の手中での恐怖』のあらすじ（後書き）

この小説は海外の　ｆｅｍｃｉｒｃ　ｆａｎｔａｓｙ（女子割礼妄想）小説を翻訳したもので、原作は„ＳＣＡＲＬＥＴ'Ｓ　ＳＡＮＣＴＵＭ„＝『スカーレットの小部屋』というスーパーヒロインの陵辱をテーマにしているサイト（ｈｔｔｐ：／／ｗｗｗ．ｓｕｐｅｒｈｅｒｏｉｎｅｃｅｎｔｒａｌ．ｃｏｍ／～ｗｉｚａｒｄ／Ｓｃａｒｌｅｔ／Ｓｃａｒｌｅｔ＿Ｍａｉｎ．ｈｔｍ）に掲載されたＳＣＡＲＬＥＴ氏による、„Ｂａｔｇｉｒｌ'ｓ　Ｎｉｇｈｔｍａｒｅ　ｉｎ　ｔｈｅ　Ｄｅｎ　ｏｆ　ｔｈｅ　Ｄｒｕｇ　Ｌｏｒｄ„（ｈｔｔｐ：／／ｗｗｗ．ｓｕｐｅｒｈｅｒｏｉｎｅｃｅｎｔｒａｌ．ｃｏｍ／～ｗｉｚａｒｄ／Ｓｃａｒｌｅｔ／ｓｔｏｒｉｅｓ／ＳＷｓｔｏｒｉｅｓ／ＴｈｅＣｈａｉｒ．ｈｔｍ）です。

タイトルの『麻薬王の巣窟での悪夢』は著作権問題を回避するために原作の直訳タイトルである『麻薬王の巣窟でのバットガールの悪夢』から固有名詞を外したものです。したがって、本文中に登場する固有名詞も別の呼称に変更してあります。適宜、脳内置換して読んでください（笑）

じつは、このストーリー、同じサイトに掲載されている別の話―„Ｗｏｎｄｅｒ　Ｗｏｍａｎ'ｓ　Ｔｅｒｒｏｒ　ｉｎ　ｔｈｅ　Ｈａｎｄｓ　ｏｆ　ｔｈｅ　Ｄｒｕｇ　Ｌｏｒｄ„＝『麻薬王の手中でのワンダーウーマンの恐怖』の続編なのですが、そちらの方は　ｆｅｍｃｉｒｃ　ｆａｎｔａｓｙ　小説ではないので翻訳してません。しかし、話の流れを多少は理解しておかないと、翻訳した話で意味が通じないところが生じるので、この冒頭にあらすじを入れました。

話の内容は、悪党に捕らえられたスーパーヒロインが衆人環視の中で陰核切除を受けるという、なかなか萌えるシチュエーションで、

すぐにでも翻訳したかったのですが、話の肝である、陰核を切除する特殊なデバイスの説明を日本語として自然な形にするのに手間取ってしまい、時間がかかってしまいました。デバイスの機能説明をうまく表現できたかどうか、今一つ自信がありませんが、なんとかイメージしてもらえれば幸いです（笑）

　ちなみに、このバットガールの話は、前のワンダーウーマンの話と違って、最後が夢オチになっています。翻訳では切除された陰核を見せられた直後、主人公が悲鳴を発し、気を失って終わっていますが、原作では悲鳴をあげてベッドの上で目覚めたところで終わっています。つまり、バットガールが“悪夢”を見ただけで、実際には何も起きなかったことになっています。これでは　ｆｅｍｃｉｒｃ　ｆａｎｔａｓｙ　小説としては、ぶち壊しなので、最後の夢オチの部分は翻訳しませんでした。

　なお、この小説は、作者より英文原作が掲載されているページのＵＲＬを表記することを条件に日本語翻訳版の公開許可を得ています。英語に自信のある方は、ぜひ訪問してみてください。原作には若干ですが、挿し絵も入っています。さらに、小説ページ以外に、イラストページでも数多くの作品がありますので、アメコミヒロインの陵辱物に興味ある方も訪問してみてください。

　あと、この作者は、この話以外にも多くの　ｆｅｍｃｉｒｃ　ｆａｎｔａｓｙ　小説を書いています——というか、陰核切除だけではなく、乳房切除なども含む、女性の性的シンボルを剥奪するという話です。いずれ、これらの小説も翻訳したと思っていますが、非常に長い話なので、いつ、翻訳を終えられるかは定かではありません（笑）

バットメイデン――そのコスチュームを身にまとっていないときは、単なる図書館司書に過ぎないバーベット・ゴードーニ――は、疲労困憊し切っていて、その場所まで、どのようにしてやってきたかさえも疎覚えだった。それにもかかわらず、自らの任務に関しては明確に自覚していた。

正義のスーパーヒロインであるバットメイデンは、女性に対する無慈悲と残忍さで有名な麻薬王――マニュエル・ロドリゲスによって営まれているパナマ沿岸での密輸犯罪を撲滅するつもりだったが、それに加えて、麻薬王が仲間のスーパーヒロインに加えた残虐な拷問に対する報復を誓っていた。

マスクを被った正義の使者は、ロドリゲスのアジトの周囲に広がる密生したジャングルを突き進んだいた。彼女は、ワンダーレディが捕らえられた経緯を聞いていたので、ジャングル内に潜んでいるはずの麻薬王の護衛者たちが一人として現れないことに対して、不信の念を感じ始めていた。

やがて、バットメイデンは遠方の海岸に沿った入り江に、小さいながらも豪奢な邸宅が建っているのを見つけた――と同時に六人の武装した男たちが彼女に襲いかかってきた。彼らがマントをまとった正義の味方を征圧することに熱心だったことは明らかだった。

バットメイデンは、まるで舞踏するように優雅な格闘術を駆使して、三人の男をあっさりと片づけた。さらに麻薬王の忠実な手下二人を倒すため、飛び上がってダブルスピンキックを放ったとき、バーベットは後頭部に強い衝撃を受けた。

スーパーヒロインがバランスを崩し、地面に落ちて仰向けにひっくり返ったとき、彼女は自分に今の状態をもたらした『もの』の正体を目の当たりにした――それは単なるブラックジャックだった。

バットメイデンは愕然とした。
（私は正義のスーパーヒロインだというのに、どうして、毎回毎回、ブラックジャックごとき安直な武器なんかで、敗北を喫してしまうのよ！）
しだいに周囲の情景は霞み始め、そして、バーベットの意識は暗転した……。

正義のスーパーヒロインが世界を再認識したとき、自分が瀟洒な建物の中――正確には書斎にいることを理解した。そのうえ、彼女にとっては不本意なことに、丈夫な椅子に堅く縛りつけられていたのだ――その椅子は、この体勢を維持するためにデザインされている特別なものであることは明白だった。
バットメイデンは身に着けていた黄色いユーティリティベルトと裏地が黄色の黒いマントを奪われていることに気づいた。ただ、幸いなことに胸に黄色いコウモリマークをあしらったグレーのボディーシャツからなるコスチュームは脱がされてはおらず、ひれ飾りのある黄色い手袋や脹ら脛まである黄色いハイヒールブーツ、そして、黒いマスクもまだ身に着けたままだった。
そのとき、バーベットは、その場に、自分一人だけがいるわけではないことに、唐突に気づいた――自分を見つめる視線を感じた左側へと首を巡らせると、白いアルマーニのスーツを着たダークグレイの髪をした男性が茶色い革張りのリクライニングチェアに座って、注意深く彼女を観察している様子が見てとれた。
男は長い足をマティーニで満たされたグラスの置かれている紫檀製のコーヒーテーブルの上に載せたまま、正義のスーパーヒロインに向かって穏やかに微笑んだ――それは自己満足を滲ませた陰険な微笑だった。
（マニュエル・ロドリゲス！）
ワンダーレディから聞かされた情報により、その男の正体は一目瞭然だった。正義のスーパーヒロインは自分の心の内に不安の芽生

えを感じて秘かに狼狽した。
「どうして、こんなふうに縛りつけられてるの？」
バットメイデンは震えそうになる声を抑えるようにして尋ねた。
「こんな辱めを受けるようなことをした覚えはないわ」
スーパーヒロインは碧色の目で男を鋭く睨みつけた後、僅かに視線を逸らす――今、彼女は自分の瞳の中に、押し殺している恐怖心が表出しているのではないかと心配していた。それで、自信に満ちた態度を演出しようと、強い口調で話し始めた。
「私はバットメイデンよ。そして、世界の平和を守る――」
麻薬王は、バーベットが「任務」という単語を紡ぐ前に言葉を遮った。
「いや、自己紹介の必要はないさ。きみが誰なのかは、よく知っているからな、お嬢さん」
ロドリゲスの話す英語はスペイン語訛りだった。
「そして、私が農場――いや、この地で尊敬されていることに対して、きみのように美しいスーパーヒロイン……さらにまた、別の素晴らしいスーパーヒロインにとっては、少なからず疑問があるらしいことも――きみとワンダーレディとの友情についても熟知している。というわけで、私は、きみたちスーパーヒロインに対して教訓を与え、二度と同じ間違いを犯さないよう授業をしなければならないわけだ」
マニュエルが手を二回打つと、アマゾンの密林内からインディアン風の衣装を着た老人が現れた。そして、麻薬王は物静かに尋ねた。
「この不法浸入者に対して、どのような教訓を与えればいいかな？マグア、何かよい授業があったら、提案してくれないか？」
バットメイデンは、ワンダーレディの話から、この非情な卑劣漢が自分に歯向かってくるスーパーヒロインに対して教訓を学ばせるために行う“授業”内容について知っていた。しかし、マグアは答えられないだろうと思った。彼がとても忠義を尽くして仕えていたはずの男性――マニュエル・ロドリゲスにより、ずいぶんと昔に仕

事をしくじった処罰として声帯を奪われていたのだ。
　マグアは、ウエイターが飲食物を運ぶように右肩に銀製のトレイを保持しながら、狂人のような笑みを浮かべると、不気味に頷いて見せた。それから、その唇を開いて、意味不明な音を発したが、当然ながら、スーパーヒロインに理解することができる単語は一つもなかった。そのとき、彼はトレイの中身に対するバーベットの視線を妨害する位置に立って、それを麻薬王の前のコーヒーテーブル上に置いた。
　バットメイデンの位置からはトレイに載せられている物を確認することはできなかったが、この残忍な男とワンダーレディとの過去の対決から考えて、それらがピアッシング用の針と乳首リングではないかと予想できた。
「教訓を与えるですって？　私に“授業„を受けなければならない謂われなんて何もないわ。ここで、私は誰にも何も被害を与えていないわ。今すぐに、私を解放してちょうだい！」
　込み上げてくる不安を抑えながら、スーパーヒロインは落ちついた口調で答えた。
「きみを解放する？　そんなことをするわけないだろう。まったく何を考えているんだ？」
　すぐさま、マニュエルが言い返した。
「だいたい、きみや、きみのような者たちは、またすぐにやってくるのだろう？　そのうえ、もしかすると、私を護衛する者たちは、次は今回ほど上手く立ち回れないかもしれない。だから、厄介な自尊心を抱いて、年長者に不遜な態度で挑んでくるスーパーヒロインたちへの見せしめとして、きみには、それ相応の教訓を受けてもらう必要があるのさ。――それに部下たちを少しくらいは楽しませてやる必要もあるしな」
　麻薬王はトレイの中から身上調査書取り上げると、それに素早く目を通した。それから、コーヒーテーブルを押しやって立ち上がると、マスクの後ろから長い赤毛を垂らしている魅力的な女性の傍に

近づくために足を進めた
「正義のスーパーヒロインによる鉄槌に悩まされたくないのなら、あなたは別の収入源を考えて、世界的に有名なスーパーヒロインを残忍に扱わないように気をつけるべきだわ」
　バーベットは自分が陥っている苦境から抜けだすために、はったりをかけようと決意して、きらりと光るロドリゲスの薄茶色の目を碧い瞳で見つめ返しながら告げた。
「そして、針と乳首リングで、私を脅かすつもりなら、どのような苦痛も、私が恐れていないことを知るべきよ！」
「べつに何も脅かすつもりなどないさ」
　麻薬王は野卑な笑みを浮かべながらも鋭い眼光でスーパーヒロインを見つめた。
「ただし、私は、この長い年月をかけて慎重に築き上げてきた小さい帝国から生じる富と権力が失われるのを黙って見過ごすほどのお人好しでもない」
　麻薬王は、なんの前触れもなく、バットメイデンの前に手を伸ばすと、ファスナーを器用に下げて、ボディーシャツの首もとから臍まで広げた。
「何をするの！　その手をどけなさいよ、この卑劣漢！！　こんなことして、ただですむと思ってるの？　私をレイプしたりしたら、あなたを必ず殺すわ。脅しじゃないわ、本気よ！　そして、乳房を晒すつもりなら、今、乳首リングなんて怖くないって言ったはずよ！」
　バーベットは憤激して金切り声を発した。
「きみは、レイプが自分に対する『脅し』にはならないということを十分に認識していないようだね、お嬢さん」
　マニュエル・ロドリゲスが冷静沈着に答える。
「『脅し』とは、相手が抱いている恐れを突くものでなければならない。そうでなければ、『脅し』など、成り立つはずもないだろう？　――要するに、私たちは、きみをレイプするつもりなんか、ま

ったくないのさ。だから、レイプに対する願望なんか持たないでほしい。この身上調査書には、きみが戦闘力や戦闘技術をほとんど持っていない、か弱い女の子であるにもかかわらず、毎晩、スーパーヒロインに変装して戦っているのは、そのレイプ願望がまさしく動機だと記されている。そして、きみには、一人の男性によって満たされることができない性的衝動がある疑いがあるそうだ。もちろん、その指摘は、単なる疑惑にすぎないわけだが、私自身は、きみがレイプで、喜びを感じるだろうということを、今、まさに確信している。したがって、きみへ処罰としても、きみの同類たちに対する見せしめとしても、レイプはまったく意味をなさないと考えているのさ。わかってもらえたかね、お嬢さん？」

バーベットは、内心では大きな衝撃を受けたが、そう見られないよう必死に表情を繕った。それでも顔面が赤くなるのを抑えることはできなかった。そして、そんなスーパーヒロインの様子を見ていた麻薬王は、身上調査書の内容が正鵠を射ていたことを確認し、にやりと笑った。

「わ…、私をレイプするつもりがないのなら、そ…、それはそれでいいわ。でも、ワンダーレディにしたように針で乳首を貫き通すつもりなら、農場が徹底的に破壊して、さらに、あなたの命を奪うことも誓うわ。ともかく、あなたたちの人間釣り竿なんかになるつもりは金輪際ないわ！！　今すぐ、これを解いて。ファスナーも上げて！　もう、あなたの邪魔はしないわ！　私が、ここに来たことが間違いだったということも理解したわ」

バットメイデンは希望的観測に基づいた返事をした。

「なぜ、きみを自由にして、そのファスナーを引き上げさせ、きみが立ち去るのを見送るような真似をしなければならないかね？」

ロドリゲスは笑いを押し殺した声で答えた。

「それに、きみの乳房になんかに興味はないさ！　ワンダーレディの女性的魅力に満ちた乳房は、彼女にとっては、勇者としての、そして、スーパーヒロインとしての誇りの証だった。私がワンダーレ

ディの授業のために、それを対象に選んだのは、彼女が自分の乳房に対して、絶大な自尊心を抱いていたからだ！　だから、乳首にピアッシングしてリングを取り付けたのは、彼女のためだけの授業なのさ。だが、きみの場合、乳首リングの取り付けは、授業としては適切ではない――もっと違う方法で教訓を学ぶ必要があると、私は考えているのさ。そもそも、その乳房は、きみがスーパーヒロインとしての道を選んだ動機ではないだろう？」

　それから、女性に対する残酷さで有名な男――マニュエル・ロドリゲスは、突然、野卑な笑みを浮かべた。

「マグア、トレイを持ってこい！」

　その命令を聞いたマグアは、コーヒーテーブルからトレイを注意深く持ち上げると、麻薬王の傍へ早足に歩み寄った。それから、年老いたインド人は皺で覆われた顔中に笑みを浮かべると、バーベットがトレイの上に置かれているものを見ることができるよう、それを低く下げながら、不気味な笑い声のようなものを発した。

　バットメイデンは平静を装いつつ、ブーツに隠したペンナイフに手を届かせようと、必死に手を伸ばそうとした。その銀製のトレイに載せられているものを、バーベットは目にしたくなかったのだ。しかし、その行為は徒労に終わった――彼女を束縛するロープには、まったく弛みがなかった。

　トレイ上には、消毒用アルコールとラベルが貼られたビン、脱脂綿の一塊、直径十五ミリほどの金属製リング、とても太くて長い針、鉗子、白い粉末の入った小さな小皿、シャープペン用か、あるいは、消しゴムペンで使用されるように形作られた数個の細長い消しゴム、そして、長さ十センチ、直径十五ミリほどの金属管などが載せられていた。

　それらを見たバットメイデンは、予想していた内容が的中したことを自覚し、それをされる自らの姿を思い浮かべると、口の中がカラカラに乾き、冷や汗が吹き出た。

「私に、それを近づけないで！」

スーパーヒロインは明白な恐怖を声色に含ませて叫んだ。
「今、ピアッシングしないって、言ってたじゃないの！」
「たしかに、その可愛らしい乳房には、ピアッシングしないとは言った。だが、きみ自身に対してピアッシングしないとは、一言も言ってないはずだよ、お嬢さん」
マニュエル・ロドリゲスは、トレイから金属管を取り上げながら素っ気なく述べた。バーベットは、その時、金属管の片端で丸い穴が開いているのを見ることができた。
「まあ、わざわざ言う必要もないんだが、私自身は、きみにリングを嵌めるつもりはないんだ。ただし、部下たちが、私の気持ちを変えさせることに成功したときには、それをする可能性も残ってはいるがね。とにかく、それについて、きみが頭を悩ませることはないさ。そもそも針先は鋭くできているから、処置自体、あまり痛まないはずだ。それにリングは清潔だし、それを嵌める小さな穴もアルコール消毒綿でよく拭くから感染症の心配もない」
突然、マグアが首肯すると、興奮しながら、早口で何かをしゃべり始める。スーパーヒロインは、そんな彼を見て、薄茶色の瞳に困惑を浮かべながら、ロドリゲスに尋ねた。
「どうして、彼は、あんなに興奮しているの？」
「ああ、マグアのことかい？　マグアのことは気にしなくていい。彼は単に釣りに行きたかっただけだ。さっきの、私の言葉に、今し方まで、彼が望んでいなかった可能性が含まれていたから、文句を言ってきたのさ。きみが十分に理解できていないということはわかっている。だから、授業を始める前に少しデモンストレーションをして見せるつもりだ。それが終わってからが授業の本番だ。もちろん、そのとき、きみからは衣服がすべて剥ぎ取られている。そうそう、その授業参観のために部下たちが集合するまでの間、きみが望むのなら、熱いシャワーを浴びることもできるぞ。きみは、将来、この日と、その授業のことをとても懐かしく思い出すに違いないからな！」

バーベットの顔が青ざめ始めた——麻薬王の言葉やトレイ上に並べられたものから、自分に何が起こるのか推測することはできなかったが、それが大勢の人間の前で全裸を晒しながら行われるということだけは理解できた。

「今すぐ、自由にして！　私は、あなたの言う授業なんか受けないわ！！」

バットメイデンは、一瞬、怒りから大声を張り上げる。それから、落ち着きを取り戻して静かに言い返した。

「敗北を喫して、束縛され、もしかしたら、それ以上の辱めを受けるかもしれないような日を、どうして、わざわざ思い出さなければならいのよ！　それも懐かしくですって？」

スーパーヒロインはより一層困惑して、その束縛から逃れようと死にもの狂いになって藻掻く。そんな彼女の様子を見て、麻薬王は金属管を弄びながら微笑んだ。それから、満足げな口調で楽しそうに答えた。

「今日を限りに、きみがスーパーヒロインをやり続ける——普通の女性としての人生を過ごすことができない、一人の男性だけを愛し続けることができない、そして、自分自身の子どもを育てることができない要因の一つが、きみから取り除かれるからだよ。そうさ、今日を限りに、きみは家族のもとに戻って、人並みの暮らしを得ることができ、私は、ここパナマでの仕事をうまくやっていくことができるというわけだ」

「スーパーヒロインとして、数年間、数多くの修羅場をくぐり抜けてきた私を、あなたが言うところの授業で、そんなにふうに変えることができるっていうの？」

バットメイデンは、まだ明らかに困惑した様子で尋ねた。

「きみが知りたいことは、これまでに話した言葉で、十分に伝わっていると思ってたんだがな……。まあ、これから行う、ちょっとしたデモンストレーションを見てもらえば、今日、きみが受ける授業内容についての疑問は氷解するだろうさ」

マニュエルは落ち着いた声色で言った。
「マグア、向こうのコーナーに置いてある作業台と万力を持ってきて、この可愛らしいお嬢さんの前に置いてくれないか」
そして、バットメイデンは、万力が作業台に取り付けられた状態で、目の前に置かれので、授業の内容が自分の指先か爪先、あるいは手足そのもの、もしかすると、乳首に対して取り返しのつかないような傷を負わせるものではないかという心配を抱いた。しかし、麻薬王が細長い消しゴムの端を万力に挟んで垂直に立てたので、彼女は自分の疑惑をひとまず保留し、行われる作業を注視することにした。
マニュエル・ロドリゲスは、消しゴム上部の先端あたりに金属管の開口部がある方の端をあてがった。そのまま、金属管をわずかに下へずらしていく――すると、マグアが不満そうに喚き始めたが、すぐさま麻薬王は部下に言い返した。
「わかっているさ、マグア。ただな、この消しゴムは、本来、このデバイスに挿入するはずの“もの”ほどは柔らかくはないからな。だから、少し長めに入れているさ」
ロドリゲスは、スーパーヒロインがまだ注意を向けていることを確認するため、その顔をちらりと見上げてから、金属管――彼の言うところのデバイス――上部にあるダイヤルをゆっくりと回した。同時に断続的な機械音が発生し始め、デバイスと消しゴムの両方が小刻みに振動している様子も確認することができた。
バットメイデンは何が起きているのか推測しようとしたものの、その顔には困惑が広がっていく。目の前で展開される光景を見ていても、麻薬王の言っているデモンストレーションが何を意味しているか、さっぱり理解できなかったのだ。
マニュエルがデバイスの何か所かをいじると、それを形成していた四つの外装のうち、二つが取り外され、内部構造が明らかとなった――直線と輪から形作られている枠組み内に、複数の歯車を噛み合わせて精巧に組み上げられた機械部分が十ミリ未満の間隔で並ん

でいる十個の柔らかそうなゴム製リングを伸縮させている様子を観察することができた。
「ほら、よく見てみたまえ」
　ロドリゲスは、トレイからピアッシング用の針を取り上げて、最も下に位置するリングを指し示した。
「枠組みの中にある各々のリングは回転しながら下降して、下のリングと接触すると、絞り効果によって消しゴムを締めつけているのがわかるだろう？　それから、リングが上昇へと転じると、消しゴムは上に向かって引っぱり上げられる――その少しだけ引き伸ばされた消しゴムが最初のリングによって適切に保持されている間に、上に連なるリングが同じように下降してきて収縮する。そのとき、最初のリングに捕らえていた消しゴムは解放され、新たに収縮した次のリングによって、さらに上方へと引っぱられる」
　連なっている十個のゴム製リングの各々が繰り返す一連の動き――降下して収縮し、消しゴムを上方に向かって引っぱり上げ、保持して解放するという連続動作をバットメイデンは魅力されたかのように凝視し続けていた。そして、しばしの間、その複雑なギミックの働きを見つめていたバーベットは、はっとして声をあげた。
「消しゴムが少しずつ長くなっているわ……。下側を万力で固定された状態で金属管内へと送り込まれているから……つまり、消しゴムは引き伸ばされているわけね！」
「そのとおりだ、お嬢さん。この消しゴムの材質は、本来、このデバイスで使用される“もの„に比べると、やや硬いため、デバイスの機能があまり効果的に働いていない。また、リングのゴム製カバーも硬い消しゴムをうまく保持することができていない――にもかかわらず、きみの観察眼は真実を見て取ることができるようだな。補足すると、このデバイスの妙は、捉えられた細長い“もの„をリングが締めつけるとき、その収縮によるダメージを“もの„に与えないよう、自動的に収縮力を調整できることだ。リングが一度に上昇する距離も同様だ。そして、これらの機能以外にも、きみに見て

もらわなければならない機能がいくつかある」
　マニュエルは自身の股間を調節するため、デバイスに対する客観的な説明を中断した——明らかに性的に興奮しているようだった。
その後、麻薬王はデバイスを形作っている四本の垂直な『梁』のうち、二本だけを取り去ると、彼らが行おうとしていることについての説明を再開した。
「部下たちがトレイにあるピアスリングを取り付けることについて、私を納得させることができれば、このようにピアッシングすることも容易にできる」
　ロドリゲスは引き伸ばされた消しゴムに対して、針をあてがい、ピアッシングする動作をしてみせた。
「その後、そのピアスリングを挿入しさえすれば、私たちは桟橋の突端で何時間かを過ごすことが可能になるわけだが……」
　マグアは、再び興奮を露わにして、彼の“スカート„の下に手を差し入れていた。そんな部下に対して、デバイスの複雑な仕組みをスーパーヒロインに可能な限り早く理解させたい麻薬王は落ちつくように合図した。
「最終的に、最も上にあるリングが収縮し、引き伸ばし限界の安全設定に基づいて引き込むことができる“もの„のすべてがデバイス内に保持されたとき、最も下にある絞り部がリングより数倍以上も高めにセットされた保持力で閉じられることになる」
　バットメイデンが見つめる前で、デバイス内で引き伸ばされ続けた消しゴムが最上部のリングに達し、下の絞り部がきつく引き締められると同時に、牽引作業を行っていた十個のリングすべてが緩んで、消しゴムが元の長さへと跳ね戻った——そのとき、唐突に、あるのことに気づいたバーベットは喘ぎを漏らした。
「なんていうことなの！　消しゴムの端が万力に挟まれていなかったら……。いいえ、金属管に引き込まれるものが消しゴムじゃなくて、もっと引き伸ばすことができる柔らかいものだったら、それは完全に金属管内へ引き込まれて、そこに捉えられたままになるわ」

スーパーヒロインが声を大にして性急に叫んだのに対して、麻薬王は落ちついた口調で答える。

「そう……そのとおりだ、お嬢さん。それこそが、きみに見てほしかった、このデバイスに備わっている機能の一つだ。そして、さらにもう一つ、最終段階の機能として……」

マニュエルはデバイスを元通りに素早く組み立て直した。それから、デバイスの一番上にある二つのボタンのうち、一つを半分ほど押し下げると、最下方の絞り部とそのすぐ上にあるマイクロタレット台だけを残して、すべてのパーツが取り除かれた。さらに、ロドリゲスがボタンを最後まで押し込むと、消しゴムが絞り部にロックされた状態のままで、その上にあるマイクロタレット台が急速に回転し始める。

麻薬王は、スーパーヒロインが目の前のデバイスを熱心に見つめているのを確認すると、その目を覗きこみながら、さらに説明を続けた。

「今、デバイスで第二のボタンを押すと、無線信号が回転してるマクロタレット台に送られ……、まあ、きみもすぐに気づくと思うが、マクロタレット台には高出力のレーザー発振器が内蔵されててな……、そのやや下方に向いてる照射口から、高出力のレーザービームが発射されるんだ。すると、どうなるか……」

バーベットは、麻薬王がボタンを押すのを見たというよりも、むしろ、それを感じた。そして、目に見えないレーザービームが高速で回転しているタレット台から発射され、その直後、消しゴムの先端部と金属管の最下部パーツである絞り部が作業台の上へ別々に転がり落ちた。

あたかも消しゴムが斬首されたかのようなシーンを見せつけられたバットメイデンは、大きく息を呑んで体を強ばらせた。しかし、その装置が如何なる目的を有しているかについては、未だに理解できないでいた。

マニュエルが言う『引き伸ばすことができる柔らかいもの』とい

う条件的には、乳首を金属管内に引っ張り込むことは可能だろう。しかし、麻薬王は、バーベットの乳房を傷つけることに興味はないと、すでに何度も主張していた。

スーパーヒロインは困惑した表情を浮かべて尋ねる。

「やっぱりわからないわ……。そのデバイスは、いったいなんなの？　いいえ、そもそも、何をするために使う道具なの？」

世界中で最も残酷な男性の一人として名を馳せているマニュエル・ロドリゲスは、年若い白人女性の耳元でやさしく囁いた。

「このデバイスはスンニ派の女性たちが行う成人の儀式に関係するものなのさ。その貧弱な医療処置によって死亡する者たちを減らす目的で、アラビア人医師によって発明された画期的な製品さ。このデバイスの存在を知ってる人々は、これを『陰核切除管』と呼んでるようだがな」

バットメイデンは、あまりの恐怖に息が止まり、顔色を青ざめさせ、また、肌の色も異常に青白くなった。

ＦＧＭ（女性器切除）と呼ばれる女性割礼――それはスンニ派では陰核切除を意味している。バーベットも知識としては、その内容を理解していた。女性の性的な快楽に制限を加えるため、体外に露出している陰核亀頭を切り取るという伝統的な手法だ。

「……私から性感を奪うために、陰核亀頭を切り取るっていうの？　そうやって、性衝動を抑えることで、私を『あなたが思い描いているような理想的な女性』に変えるつもりなの？」

「勘違いしてもらっては困るな、お嬢さん。クリトリスの先っぽを切り取るくらいじゃ、単に性衝動を扱いやすいレベルまで引き下げるだけじゃないか。そうしたら、きみは、より完璧なスーパーヒロインとなって、今回のように、私自身と私のビジネスの前に立ちはだかり、より大きな脅威になるだけだろう。だから、部下たちが魚釣りではなく、そちらを望めば、クリトリスのすべてを切り取るつもりだ！　本格的な外科手術をやらずに切り取ることができる最大限――陰核亀頭のすべてと陰核体のすべて、要するに、陰核器官が

陰核脚を形作るために分岐する手前までの部分をほぼすべて切り取ることになる。今、きみが見たデモンストレーションでは消しゴムがやや硬い材質だったから、『陰核切除管』の奥までは引き伸ばされず、先っぽしか切り取れなかったが、これが柔らかな人体組織──つまり、クリトリスだったたら、そのすべてを完全に引き込んで、切り取ることができるというわけさ！」

その言葉を聞いたとき、バーベットは『陰核切除管』に捉えられて切断された“もの”が消しゴムではなく、生身の器官であるイメージを思い浮かべた──次の瞬間、周囲の景色が色褪せて霞み始めるのを感じた。

麻薬王の巣窟での悪夢（後編）（前書き）

【警告】本文中には女性に対する猟奇的な虐待を克明に描写しているシーンが多々あります。人体切断（具体的には性器切除）や流血の類が苦手な方は閲覧を控えてるようにしてください。

マスクを被った正義の戦士が再び意識を取り戻したとき、天井や壁が金属製でできている大きな円形の部屋にいることに気づいた。気を失っている間に椅子ごと移動させられたようだった――彼女は依然として、それに固縛されたままだった。

スーパーヒロインを強制的に座らせている椅子は、部屋の出入口と同じレベルの床面に置かれていたが、弧を描く外壁には高さ三メートルほどのところに幅広のプラットフォームが設けられており、それなりのスペースがあるようだった――彼女は、この部屋が通常はコカインの処理施設として機能しているのだろうと推測した。

そして、バットメイデンは、今、とても不幸な状況に陥っていた――彼女はマスク以外の着衣をすべて奪われており、裸のままで足を大きく広げさせられて、しっかりと椅子に結びつけられていた。当然ながら、女性器は無防備に晒けだされており、麻薬王が陰核を切除するデバイスを使用するにあたり、如何なる障害も存在しない状況だった。

実際、開かされている太腿の前にあるガラス製テーブルの卓上には、そのデバイスを始めとして、様々な物が並べられているトレイが載せられていた。さらにトレイの横には透明な立方体も置かれていた。その一面には小さなラベルが貼られていたが、バットメイデンからは反対側だったので、記されている文字を読むことはできなかった。

残酷な麻薬王――マニュエル・ロドリゲスは、今や、正義の戦士であるバットメイデン――バーベット・ゴードーニを絶望の淵へと追いつめていた。

（あの男は、あのデバイスを本当に使うつもりなのかしら……？）

そして、唐突に部屋の扉が開かれると、バーベットの恐怖を体現

する人物が入室してきた。彼女は恐れから顔面を蒼白にさせ、その後、自分があられもない姿を晒していることに思い至たって、たちまち赤面した。
　一方、ロドリゲスは、ゆっくりとした足取りでスーパーヒロインの傍にやってくると、彼女の右に回り込むようにして立ち止まり、厳しい眼差しで若い女性を見下ろした。そのとき、バットメイデンと麻薬王の視線が絡み合った——バーベットは恐れを微塵も感じさせない挑戦的な目でマニュエルを睨み返す。椅子にしっかりと結びつけられていたため、彼女はボスの後ろから目立たないように部屋へ入り、自分の左側に立ったマグアには、まったく気づかなかった。
「さてと、世界的に有名なスーパーヒロインと同席できるという栄誉を、私に与えくれた愚かなお嬢さん。——まあ、私にとってはない方がありがたい栄誉なのだがな……。これから、きみが人生の教訓を学ぶ授業を始めようと思うが、それを受ける覚悟はできたかね？」
　麻薬王は薄茶色の目に非情な光を宿しながら、束縛された無力なスーパーヒロインに話しかけた。
「私が、ここにやってきたのは間違いだったたって、さっき言ったでしょう」
　バットメイデンは掠れた声で応じた。
「そうよ。私は、あなたの言うところの教訓をもう十分に学んだわ。今すぐに、私を自由にしてちょうだい。そうしたら、私は二度と戻ってこないと約束するわ！　でも、これ以上の危害を加えるつもりなら、必ず戻ってきて復讐を果たすわ！　だから……、私を解放してちょうだい……」
「お嬢さん、きみは本当に信じられないほど愚か者だな！　私は実業家なのだよ。そして、その事業を成功させるためには、私に対する部下たちの変わらぬ忠誠心が必要となる……。それは絶対の真理なのだよ」
　ロドリゲスは苦笑いを浮かべつつ、穏やかな口調で語りかけてき

た。
「そして、金品だけでは人の忠誠心を得ることができない。そこで、部下たちのために催すこの小さなエンターテイメントが事業の成功に大いに役立つこととなるわけだ。まあ、ことさら言うべきことでもないが、こういうふうに部下たちのモチベーションを維持することが良いリーダーの条件なのさ。また、部下たちは、きみ同様に、私への不忠が間違いなく教訓の対象となることを理解しなければならないし、地元民たちも、私への反抗の結果を十分に学ばなければならないのさ……。――マグア、参観者たちを呼び入れてくれ！」
年老いたインド人が指を唇に当てて、大きな音の口笛を吹くと同時に、麻薬王の護衛者たちが列をなして部屋に入り、武器を構えたまま、湾曲した壁を背にしてプラットフォームに立ち並び始めた。その次に、コカイン事業に携わる労働者たちが列をなして入室し、部屋を取り囲むように護衛者たちの前に立ち並んだ。そして、最後に村の農民――男性たちや女性たち、そして、その子供たちがプラットフォーム下で並んだ。
その光景に、バットメイデンは顔を真っ赤にして瞳に涙を滲ませた。そして、怒りに満ちた声音で、麻薬王に言い募った。
「ロドリゲス、私の裸を隠してちょうだい。こんなにもたくさんの人たちに、こんな格好を晒すなんて酷すぎるわ！」
「静かにしろ、不法侵入者！」
マニュエルが吐き捨てるように言い返した。
「ここでは、きみが何を言おうと、関係ないのさ！」
それから、麻薬王は、いかにも不本意な義務を遂行しようとしているかのような顔つきをして、床からプラットフォームを埋め尽くしている人々を見上げた。それから、自分の隣で椅子に座らされている女性を身振りで示した。
「諸君、私の隣にいる侵入者を見たまえ。この女は、私の営みを……諸君らの営みを邪魔しようとして、この地にやってきた！　私は、彼女に対して、私たちの営みを二度と邪魔する気を起こさないよう、

人生の教訓を与えることにした。それで、この特別授業を諸君らにも参観してもらうため、この場に集まってもらったのだ。私は、この侵入者に対する授業の内容が周囲の村々で幾晩にもわたって語り継がれるに違いないと確信している。そして、その伝聞は、私たちの営みを妨害しようと試みる他の部外者に対する警告としても役立つだろう。――それでだ、この侵入者の不幸な運命を目撃したくないと思う者は、今、子供たちを連れて、この場から立ち去ることを許そう」

そう言ってロドリゲスが鷹揚に頷くと、村の長老は子供たち全員、女性たちのほとんど、男たちの大半を引き連れて部屋から出ていった。その場に留まった集団は、主に麻薬王の護衛者たち、事業の従業員のほとんど、そして、村からの見学者は若い未婚の男性たちと、明らかに村の売春婦とおぼしき少数の女性たちから構成されていた。

それらの者たちは、今、プラットフォームの手摺りまで近寄って、ショーの特等席を奪い合っていた――多くの男たちが手摺りから身を乗り出すようにして、裸のスーパーヒロインを好色な目つきで見下ろしていた。さらに、それらのうちの何人もの男が股間で一物の収まり具合を調節したり、あるいは、ズボンの中に手を差し入れて、猛り立つ肉棒を自ら慰めたりしているようだった。

「バットメイデン、きみが人生の教訓を学ぶための時間だ……。生涯にわたって忘れられない授業を受ける覚悟は、もうできただろうね？」

マニュエルは縛られたスーパーヒロインに右側から近づくと、乳房に右手を、内股に左手を当ててやさしく尋ねた。

「いやーっ！　やめて！　触らないで……」

バーベットは尻すぼみの叫びを発した。

「静かに、お嬢さん……。きみにはスーパーヒロインとしての矜持がないのかね？　この授業の参観している者たちに、バットメイデンが情けない臆病者だと記憶されたいのかね？　――さあ、マグア、ここに来て、お嬢さんが授業を受ける手伝いをしてやりなさい」

マグアは、バットメイデンの股間にあるトレイの前まで素早く移動すると、銀色の金属管を拾い上げて自分のボスに手渡した。それから、少量の白い粉を小皿から右手に掬い上げた。それから、彼は素早く少女の左側へ移動すると、その体の上に屈みこんで、ロドリゲスが次の行動を起こすのを待った。

二人の男性が自分の周りをせわしく動き回る様子を見て、バットメイデンは無言のまま震えた。スーパーヒロインの体から手を離した麻薬王が、彼女の上に屈みこんで陰門の上部へ金属管の開口部をあてがうと、性的な興奮から乳首がほん少し固くなり始める。

バーベットは陰核が堅く充血して、まるで圧倒的な敵軍によって包囲されているにもかかわらず、抵抗し続ける勇敢な戦士のように、その包皮の下から外に突き出てきていることを自覚したので、全身を真っ赤に染めた。

マグアが少量の白い粉を掌から自分の性器に向けて吹き飛ばし、それが真綿のような雲となって微かにに漂う様を、スーパーヒロインは畏怖の念をもって眺めた。そして、その白い霧が湿気を帯びた粘膜に触れるや否や、それがコカインであることを知った——それによって、快楽器官は神経を麻痺させられるが、粘膜より幸福な気持ちをもたらすドラッグの成分が吸収されて、より大きく膨らんで屹立させられる原因ともなる。

ロドリゲスが小さな脈動を開始した器官に対して、上方からデバイスの開口部を押し当てたとき、目的物を罠に捕らえるデバイスの機能は、今回はその仕様どおりに働いたようだった。バットメイデンは不安で目を大きく見開きながら、小さな喘ぎを漏らした。

バーベットは金属管内で陰核亀頭に触れようとする最も低い位置にあるゴム製リングの最初の動きを感じ取った。そして、すぐに、そのリングが敏感な肉の周囲で収縮するのも感じた。苦痛は感じられなかった——ただ、異様な感じがするだけだった！　それから、それを上に引っぱられる感覚があった。やはり、痛みは感じられなかった——しかし、麻薬王が事前に行ったデバイスの機能説明によ

って、彼女は完全なパニック状態に陥っていた。
「いやーっ！　やめてーっ！　こんなもの、使わないで！　こういう形で、私に罰を与える必要があるなら、クリトリスの先端を少しだけ――亀頭の一部を切り取るだけにしてちょうだい。それだけで神経には性衝動を減少させることができるくらいの損傷が与えられるわ。……それで、私の性的欲求は、あなたが主張するような理想的な女性と同じになるわ！」
　マスクを被ったスーパーヒロインは嘆願するように声をあげた。
「きみが提案するような処置など、この村では、とうに知れわたっているのさ、愚かなお嬢さん」
　麻薬王は声色に苛立ちを滲ませながら説教した。
「村人の多くは未婚の娘が数年間にわたって抱き続ける淫らな渇望に対する予防策として、思春期の始まる直前に、クリトリスの先端に神聖な十字架を刻む習慣を持っていて、それが神への忠誠の証として、娘の人生がイエスによって祝福されると信じてる。――それに、きみのクリトリスから『先っぽを切り取る』ことが、私の満足にとっては十分ではないと、すでに告げたはずだ。それだけでは、きみが学ばなくてはならない授業としては、不十分なのだよ」
　バーベットは絶望感から目を閉じると、そっと呻いた。すでに自分の器官を引っぱっている力が少しずつ高まっていることを自覚していた――その感覚が、まだ、それほど不愉快ではないことに自分自身が信じられなかった。そして、乳首は、彼女が感じている穏やかな性的興奮を反映して、さら堅くなっていた。
　バットメイデンは、上方のプラットフォームから聞こえてくる衣擦れの音、囁かれる睦言、そして、快楽に浸る低い喘ぎ声を耳にした。彼女はそっと薄目を開けて周囲の様子を秘かに窺った。
　何人もの男性たちが引き下ろしたズボンを足首に絡ませている一方、それ以外の者たちがズボンのチャックを下げて、そこから怒張した男性自身を突き出させていた。その男たち多くは自分自身の掌で己の直立を握り締めていたが、一部の恵まれた者たちは売春婦の

手、あるいは口による奉仕を受けていた。
それらプラットフォーム上の人々は自分たちの性的な興奮を高めるために、あられもない姿を晒しているバーベットの裸体をじっと見下ろしていた。若いスーパーヒロインは、そのような恥辱と自身が直面している大きな脅威にもかかわらず、それによって、さらに自分自身の劣情が高まっていくのを抑えることができないでいた。
「マグア、コカインをもっとだ」
マニュエルがバットメイデンの濡れぼそる女性器を指で器用に広げて探りながら、そう告げると、年老いたインド人はすぐさま応じた。彼はスーパーヒロインの横に再び屈み込むと、掌から粉末状のドラッグを大きく広げられている陰門に向けて勢いよく吹きかけた。バーベットは粘膜へ沈着する微粒子による刺激だけではなく、老人の熱い吐息をも直に感じて、思わず身震いした。
その様子を満足げに見ていた麻薬王は年老いたインド人に対してニヤリと笑いかけると、舞台の上から淫らな群衆に向けて呼びかけた。
「私は、諸君が、このお嬢さんが人生の教訓を学ぶところを見ながら、このように楽しげに時間を過ごしていることをとても嬉しく思う。このパーティーにテキーラとビールしかないのは申し訳ないが、飲みたいだけ飲んで大いに楽しんでくれたまえ！」
そのとき、麻薬王は年老いたインド人のペニスが自分のものと同じくらい堅く張り詰めて、その解放を欲していることに気づいていたので、マグアに対して、売春婦の元に行く許可を与えた。
ロドリゲスは椅子に縛られているバットメイデンが大きく喘ぎ、そして、激しく身悶えしている様から、このささやかなショーにおけるクライマックスの瞬間が近づきつつあることを感じた。
一方、バーベットにとって、状況はあらゆる意味で絶望的になっていた。彼女はオルガスムの瀬戸際にいることを自覚できるほど、自身の状態を十分に理解していた。さらに、それに加えて、性器の中心部を引っぱられる感覚は、今や、痛みこそないものの、激しく

不快なものになりつつあった――。
　――そして、前もってセットされていた引き伸ばし限度に達したため、精巧なデバイスは絶え間なく続いていた〝収縮～牽引～保持〟の動きをぴたりと停止させた。ほんの束の間、まさに時間が静止したようだった――その直後、バーベットの発する大きな叫び声が部屋中に響きわたる。
「いやーっ！　もういやーっ、外してー！」
「そんなに騒ぎ立ててはみっともないぞ、お嬢さん」
　マニュエル・ロドリゲスが冷たく言い放つ。
「さてと、このデバイスの中に、どれくらいのものが引き込まれてるか、確かめてみるとするか。――それから、それをどうすべきかを決めるとしよう」
　麻薬王は、銀色の金属管の分離機構を手際よく扱って、デバイスの外側を形成するシェルの最上部と最下部の部分を取り外した。すると、バー、リング、ギア、そして、他の精巧に組み立てられた機械部分の構造体内に、バットメイデンの快楽器官のほとんどがゴム製リングによって引き伸ばされて捉えられているのが一目瞭然となった。
「ふむ……。予想していた以上に、うまい具合に引っぱり込んでいるようだな」
　バットメイデンは、これまでに一度も感じたことがなかった肉が外気に晒される感覚に、息を切らして金切り声を張り上げた。
「いやっ！　いやーっ！　それを外して！　本当に……とても……耐えられないくらい、変な感じなのよ！」
　スーパーヒロインは左右に首を振って、大きな喘ぎで息をついた。ドラッグにまみれた快楽器官を限界まで引き伸ばされている感覚は信じがたいほど狂気的なもので、さらに非常にエロティックだった。
「で、諸君？」
　マニュエルは舞台上で度を越した醜態を晒している白人の少女を大袈裟な手ぶりで示しながら、同じように熱狂的な情欲に浸りきっ

ている参観者たちに尋ねた。
「これで授業を終わりにして、この外国人のスーパーヒロインを家に帰らせてやってもいいかね？」
室内で返答ができる者たちは、全員が麻薬王の提案に対して、否定的な声で応じた。それを確かめたロドリゲスは、トレイからピアスリングと針を取り上げ、デバイス内に捉えられている真っ赤な肉へ針の先端を向ける。
「よくわかった、諸君！　このスーパーヒロインを無傷のままでは解放しないことにしよう」
麻薬王は鷹揚に了承しつつ、再度、尋ねる。
「それで、諸君が求めるものはなんだね？　埠頭の突端まで出かけていって、これを釣り竿代わりにして、残りを授業を海に委ねることかね？　それとも、これを記念品として得ることかね？」
それに対して、すでに汗と精液の匂いが満ち溢れた部屋にいる男たちは、この場で誰もがオルガズムに達したかったたかったし、また、その余韻に浸るために酒を飲みたかったので、明らかに後者の方を望むように応じた。
マニュエルは肩をすくめて、マグアに微笑んだ。
「すまんな、友よ。みんな、今日は魚釣りには行きたくないらしい。授業の最終段階として不法侵入者に人生の教訓を学ばせなければならないようだ」
バットメイデンは、涙が顔を流れ落ちているままにして嘆願した。
「いやっ……。もう、許して……。私、こんな酷い目に遭わされるようなこと、何もしていないわ。お願いだから、自由にして……。この機械をすぐに外して——引っ張られているクリトリスがもう千切れそうだわ。お願いよ、早く外して！！」
「部下たちが望んでいることを聞きただろう、お嬢さん？」
麻薬王は穏やかに答えた。
「きみに人生の教訓を与えず、このまま解放することはできないのだよ。だが、私も決して無慈悲な人間ではない。だから、クリトリ

スが引き伸されている状態からは、今すぐに解放してやろう」
そして、野卑な笑みを浮かべたロドリゲスは、外装を元に戻してデバイスを組み立て直すと、無造作にスイッチを操作した。すると、デバイス内に限界まで引き伸ばされて捉えられている快楽器官の付け根で絞り部が閉じ始める。
その動きを感じて、バーベットは短く息を切らしたが、さらにきつく締めあげられていったので、その口から漏れていた喘ぎは甲高い悲鳴へと変じる。一方で、器官全体を締めあげていたゴム製リングのすべてが開放されたことにより、限界まで引き伸ばされていた肉芽はデバイス内で、ゆっくりと正常な状態へと戻り始めていた。
締めあげられ、引き伸ばされていた快楽器官を一気に解放されたバットメイデンは、この後に自分自身の〝もの〟を切り取られると知りつつも、クライマックスに達する寸前だった。薬物性多幸症を伴う性的な快感は、バーベットが心の底から感じていた恐怖を麻痺させているようだった。
ロドリゲスが別のボタンを押すと、絞り部とその上のマイクロタレット台だけを残してデバイスは取り外された。そして、取り残された絞り部の中心部から突き出ている快楽器官は極度の充血によって、依然として大きく膨らんだままで、あからさまに目立っていた。
「お嬢さん、きみはクリトリスが動物——もちろん、人間も含めてのことだが……、動物に備わっている数多く器官の中で、最も無意味なものであるということを知ってるかね？　それは単に性的な快楽を与えるだけで、他に有用な機能は、まったく持ってないのだよ。だから、この器官を取り去ったとしても、性的な快楽に対する欲求は減少するものの、オルガスムに達することは可能だし、身体的にも悪影響を及ぼすことも、まったくないのだよ」
スーパーヒロインの性器を指で探るように調べながら、ロドリゲスはやさしく囁いた。
「いやーっ！　そんなことしないで……。クリトリスを切らないで！　そんな理屈を聞かされても、とうてい受け入れられないわ……。

お願いだから、そんな酷いことはしないで！！」
バーベットは騒ぎ立てる群衆を意識して、低い囁き声で嘆願した。
「残念だが、きみの懇願に応じることはできないな、お嬢さん」
マニュエルは穏やかに返事をする。
「きみは最後まで授業を受けなければならない。だが、きみが望むなら、その器官の唯一の機能を最後にもう一度だけ使わせてやってもかまわない。きみはオルガズムを欲するかね？」
「お願い……、いえ……」
スーパーヒロインは赤面して口ごもった。
「つまり……、ああ……、私はオルガズムを……必要とするわ。でも……、どうか……レーザーを……使わないで……。このままにしておいて！　私がイッたら……自由にしてちょうだい！　お願いよ……」
「何度も言ったが、きみの懇願を受け入れることはできない。まあ、前に言ったことだが、きみは、今日を限りに、スーパーヒロインとしての秘密を持つこともなく、また、冒険やその他の楽しみを求めて、夜な夜な街に繰り出すこともなくなるだろう。そして、きみが新しい人生——若い女性にとって、心身ともに健康的で有意義な人生を歩み始めた記念日として、いずれ、今日の授業のことを懐かしく思い返すことになるだろうさ。——マグア、来てくれ。お嬢さんがクライマックスに達せられるよう、手伝ってやってくれ」
マグアが拘束されたスーパーヒロインの前で屈み込むと、ロドリゲスも女性器へ中指を挿入し、その上方でピクピクと震えている過度に敏感な器官に触れないよう気をつけながら巧みに指を使い始めた。
バーベットは、麻薬王の熟練した指使いによって胎内奥深くから引き起こされる性的な衝動からだけでなく、彼から下された非情な宣告によっても感情を異様に高ぶらせていた。さらにマグアの熱い息が過敏になっている陰核亀頭へ吹きかけられるのを感じて、激しい喘ぎを繰り返し漏らしながら、クライマックスへと上りつめつつ

あった。
　スーパーヒロインの瞳から理性の光が失われ、その表情が快楽から醜く歪んだとき、ロドリゲスはデバイス本体の最も低い位置にあるボタンを押した。その瞬間、バットメイデンの捉えられている陰核体の付け根でマイクロタレット台が急速に回転し始めた。
　性的な中枢部に回転する機械からの振動をじかに受けたバーベットは、これまでに経験したことがない強烈な刺激を味わった。そして、それは、ふだん感じることができる数倍ものオルガズムを爆発させる導火線となった。
　スーパーヒロインは性的な快楽の大波が続けさまに全身を駆け巡り、自らがあげる絶叫が室内に延々と谺し続けているのを耳にした。そして、女性に対する残酷さで悪名高い男――マニュエル・ロドリゲスが自分の嬌声に被さるようにして何かを告げるのを聞くこともできた。
「バットメイデン、私たちは、きみにオルガズムを与えた。したがって、きみの授業を終える時間だ。そして、それは同時に、私が特別な記念品を得る瞬間でもある！」
　ロドリゲスはデバイス本体の下部にある第二のボタンに指をかけながら、静かに、そして、冷酷に最終的な決定を通告する。快楽に支配され、激しく叫びたてるスーパーヒロインが、その言葉を理解することができたかどうは疑わしかったが、麻薬王は回転するマイクロタレット台で高出力レーザーが照射されるスイッチ――第二のボタンを躊躇なく押し込んだ。その直後、絞り部にきつく嵌り込んでいた陰核体の下部から、はっきりと聞き取れる鈍い断裂音が生じた。
　それにもかかわらず、スーパーヒロインには如何なる苦痛の兆候も見られなかった。しかし、快楽器官はきつく締め上げられた状態から瞬時に解放され、デバイスの絞り部とマイクロタレット台、そして、切り飛ばされた肉片が、バーベットの太腿の間でテーブル上に転がり落ちた。ロドリゲスは、その様をまるでスローモーション

映像を見るかのように凝視していた。
一方、まだ、クライマックスに達していなかった室内の男たちは、その光景を見た瞬間、一斉に空中へ肉欲の飛沫を放っていた。その濃厚な精液の匂いが立ちこめる中、麻薬王はテーブルの上に転がっている大切な記念品となる肉片を鉗子で素早く摘み上げると、それを保存ケースへ収納するための道具を使った。
「バットメイデン、今、きみは教訓を得たはずだが、それで、どんな気分だね？」
そう尋ねつつ、ロドリゲスはバーベットの注意を引きつけると、透明な立方体の保存ケースをかざしてみせる――麻薬王の顔ににに野卑な笑みが広がっていた。同時に大勢の部下たちが喝采の声をあげていた。
正義のスーパーヒロインは驚愕と喪失感に目を大きく見開いて、『バットメイデンのクリトリス』と記されているラベルが貼られた保存ケース内の、かつては自分の一部だった“もの”を呆然と見つめた――それは透き通ったキューブの中に閉じ込められた薄桃色の芋虫のようだった。
バーベットは、再び世界がぼやけ、色褪せ始めたと感じたとき、延々と続く悲鳴を耳にしていた。しかし、それが自分の発している叫びだということを自覚することはなかった。そのことに気づく前に、彼女の意識は深い闇に包まれていた。